

第 13 話 同い年の青春映画スター・三浦友和

●わたしの三浦友和論

話は三浦友和の活躍に戻る。

山口百恵がスターの輝きを示すだけでなく女優として希有な才能を発揮していたのはわたしもちろん認めていたが、それより気になっていたのは三浦友和の方だった。同性で同年生まれの青春映画スターの登場が、うれしくて仕方がなかったのである。しかも、その演じる役は『伊豆の踊子』の一高生をはじめ純粹で素直な性格の若者であり、今とは違い大学を出たばかりの世間知らずで、文部省（当時）に入省し日本の教育を変えようと夢見ていたわたしと似た境遇に思えた（容貌は全く似ても似つかないが）。

76年に発行された『日本映画 1976 1975年公開日本映画全集』（責任編集＝佐藤忠男＋山根貞男 芳賀書店）は、斜陽化していた日本映画界にあって久々に出た写真満載の年鑑データ本である。編集に当たった両先輩評論家から駆け出しのわたしにも執筆を依頼され、青春映画の項目を担当するとともに、「スター論」という箇所での自分の選んだ俳優について書くよう紙幅を与えられた。

迷わず選んだ三浦友和論執筆を許してくれた佐藤さんと山根さんには感謝している。だって、他の男優論はというと西脇英夫さんの渥美清論、高田純さんの菅原文太論、佐藤忠男さんの萩原健一論なのである。『男はつらいよ』の渥美、『仁義なき戦い』『トラック野郎』の菅原、『約束』72、『股旅』『化石の森』73、『青春の蹉跎』74、『アフリカの光』75など話題作に主演が相次いでいた萩原と並んで、新人の友和なのだから。

ちなみに女優論の方は山口百恵、志穂美悦子、秋吉久美子、宮下順子という顔ぶれで、筆頭に据えられた百恵の大器ぶりが早くも評価されていた。

【三浦友和論

最近の青春映画は、テレビの人気歌手を主演者としたものが数多い。今や、スターになるだけの資質と魅力を持った若者は、歌手への道を選ぶ傾向にある。テレビの普及により、歌唱力よりむしろ視覚上のイメージが重視されてきたからだ。売れっ子歌手たちを見ると、それがよくわかる。

長嶋茂雄が陸上競技界からも属目されていた、という話がある。ひとむかし前、スポーツの天才を有する少年たちが皆、プロ野球へ進んで、アマスポーツの関係者を嘆かせたも

のだ。それと同じに、今、人の心を惹きつける個性は、歌謡界に集中しているのだ。映画における青春も、彼らによって担われている、と言ってもよかろう。

だが、俳優にも、新しいすぐれた個性が現れないわけではない。ブラウン管の中で、虚構がかった仕立てあげられ方をされた歌手たちとは違った、かっちりとして自己を確立しているところが、映画俳優にはある。その中の新しい才能、三浦友和も、そのひとりだ。

男性スターには、ふたとおりのタイプがある。ひとつは、固有の風貌と雰囲気独特の味をかもし出す個性派。もうひとつは、端然とした容姿の、いわゆる二枚目。三浦友和は、もちろん、後者に当たる。

上背があり、厚い逞しい胸、幅の広い肩、均整のとれた立派な体格だ。膚の色は、いかにも健康的に浅黒い。短めに整えた髪。きりりとした、やや上がり気味の眉。一重まぶたの涼し気な目。形の良い高い鼻。一文字に結ばれる口と角ばった顎。まるで、古代の彫像に魂が宿ったような肉体だ。どこにも非の打ちどころがない。

昭和二十七年一月生まれ。ぼくより六ヵ月年長なだけ。同年だ。ところが、姿かたちは大違い。逆立ちしてみても敵いはしない。見るたびに、自分とひき比べて、そのあまりのハンサムぶりにうんざりしてしまう。世の中にはこんな美男がいるのかと思うと、明々白々な差だから、嫉妬するより先に、ただ感服してしまう。男から見ても、ちょっと惚れ惚れするいい男なのだ。

世の女性たちの心を捉えるのは、言うまでもない。七五年、お正月映画『伊豆の踊子』で山口百恵の相手役として銀幕に登場して以来、『潮騒』でも彼女と、そして『阿寒に果つ』では五十嵐じゅん（淳子）と共演。『青い山脈』では、彼自身の人気で主演者のひとりとなり、『陽のあたる坂道』に至って、ついに、一本立ちで客の呼べるスターにまで成長した。山口百恵との三本目の映画『絶唱』では、それまでのように“山口百恵の相手役”という立場ではなく、彼女と並び立つ看板だ。一年ばかりの間に、押しも押されもせぬ青春映画の代表男優になってしまった。彼のためにローテーション

しかし、十人が十人、美男と感ずるのは、裏を返せば個性がないということになる。これまで、多くの美丈夫たちが、個性のなさゆえに、単にのっぺりとした二枚目、の評価に留まって、時代を画するまでの声望を得られずに終わっているのだ。こと近年は、強烈な個性が求められてきた。

にもかかわらず、七五年を代表する青春映画の若者、といえば、三浦友和の名を挙げねばなるまい。観客からの支持は絶大なものであり、主演作のすべてが、興行面でも、大きく当たった。それは、この年が彼の時代であった事実の、確固たる証左だ。

TBSテレビの『赤い疑惑』など、テレビ、ラジオ、CMと、あらゆる分野で活躍したし、本来テレビ畑出身なのだが、スターとしての地歩を築いたのは、あくまで映画においてだ。映画出身者がテレビで人気を得る、というのはよくある例だけれど、その逆なのだ。ぼくたちは、彼のことを、映画俳優として認知できる。

だから、三浦友和を七五年のスターに仕立てたのは、他にもない、ぼくたち観客だ。その感性が、彼を選び、自分たちの代表という位置につかせたのだ。スター三浦友和の存在は、若い観客たちの感覚によって裏づけられている。ならば、彼の存在感について語ることは、七五年という時点を生きたぼくたちの感性を究めることになる。

その存在感とは一。

ひとくちに言うなら、素直な健康さだ。『伊豆の踊子』では育ちの良い秀才。『潮騒』では率直な志を持つ漁村の青年。『阿寒に果つ』では受験優等生。『青い山脈』は、因襲に囚われない快活なバンカラ。『陽のあたる坂道』は、決してひねくれない継っ子。そして『絶唱』では身分を超える大胆さを持った大地主の跡取り。皆、すんなり伸びた若竹のような人間だ。

屈託がなく、のびやか。暗い影など感じさせない。特に人並みすぐれた才能を示すわけではない。が、周囲の出来事に新鮮に感応することのできる、やわらかな心でいる。容貌のさわやかさ、そのままだ。

とすれば、そうした素直な健康さを、ぼくたちの感性は希求していたことになる。体制におもねり、一途に上昇志向を示す型でも、反社会的な立場で過激な思想に走る型でもなく、また、世をすねて虚無的に構える型でもない。力まずに、自然体のまま生きていく素直さ、健康さを、魅力に感じたのだ。

ことに、『陽のあたる坂道』の主人公たちが印象深い。金持ちの父親一家に育てられる私生児。いくらでも、すねたり暗い影を持ったりできるような境遇でいながら、そうはならない。決して声を荒げたりせず、怒る代わりに微笑む。それが、無理に作った態度ではなく、自然のままなのだ。三浦友和自身の存在感と、ぴったり合って感じられる。

ただ、その感じが上滑りして安易になぞられると、『絶唱』の主人公になってしまう。素直な健康さが、うわべだけの底の浅いものになる。中は空洞、といったような。奥深い部分での懊悩のきびしさがあって、はじめて、表面ののびやかさが生きるのだ。それが、この地主の息子にはない。だから、いい気なもの、と思わせるほど、考えが甘い。作品自体の甘ったるさもあるのだけれど。

スター三浦友和自身の落とし穴も、この辺に口を開けている。スターとしての魅力である彼の存在感が、その個性のなさのために、稀薄化してしまう危険性がある。天賦の容貌や雰囲気ばかり頼っているわけにいかないのだ。甘さに墮してしまわぬよう、内奥の充実を図らねばなるまい。

そしてまた、この戒めは、三浦友和を支持している現在のぼくたち若者にも、当然のこと、向けられてくるのだ。

(『日本映画 1976 1975 年公開日本映画全集』より)

末尾部分で「甘さに堕してしまわぬよう、内奥の充実を図らねばなるまい」と注文したのは、新人を敢えて取り上げた自分への自戒もこめていたが、それよりも三浦の大成を望めばこそその臆慮意識からのものだったと思う。これを執筆した時点では『絶唱』までが公開されており、『青い山脈』や『陽のあたる坂道』はあったものの、まだ一般的には、山口百恵の相手役に起用された幸運な新人との見方をされるが多かった。

●友和の進境ぶりに意を強くする

実はこの4年後、『日本映画 1980 1979年公開日本映画全集』（責任編集＝佐藤忠男＋山根貞男 芳賀書店）にも、わたしは三浦友和について書いている。今度は「わが主演男優（女優）賞」と題したコラムだ。事実、1979年度キネマ旬報ベストテンで、わたしは友和に主演男優賞の1票を投じている。まずは、4年後の友和をどのように論じているかをお読みいただきたい。

【わが主演男優賞 三浦友和～青春晩期の重苦しさ

四年前、本書の七六年版で、ぼくは三浦友和論を書いた。日本映画ひさびさの二枚目人気男優として颯爽と登場した彼の魅力を、“素直な健康さ”と論じたものだ。そして、端正な顔立ち、のびやかな持ち味を賞用しながらも、《天賦の容姿や雰囲気によって頼っているわけにはいかないのだ。甘さに堕してしまわぬよう、内奥の充実を図らねばなるまい》と、課題を呈した。

79年から80年へ向けても、三浦友和は押しも押されぬ看板スターの座にいる。『黄金のパートナー』（西村潔）、『ホワイト・ラブ』（小谷承靖）、『遠い明日』（神代辰巳）、『天使を誘惑』（藤田敏八）と、ゴールデンウィーク、お盆、シルバーウィーク、お正月の時期に主演作で四本。しかも、それぞれ現在の代表的な気鋭の監督が演出している。きわめて恵まれた、順調な仕事ぶりだ。

それは、とりもなおさず、彼が甘さに堕してしまわなかったことを意味している。ただの容姿だけの取り柄しかないのだとすれば、単純な美男崇拜ではないはずの観客たちの間で、これだけの支持を得られようもあるまい。独自の存在感があればこそなのだ。にもかかわらず、俳優・三浦友和への評価は、不当なまでに過小だ。内面の表現力が皆無であるかさえ、指弾される。79年の彼の所業は、十分主演男優賞に値するというのに。

『ホワイト・ラブ』以下の三作では、いずれも、ひとつ屈折したものをかかえ込んでいる若者の役だ。しかも、野放図にエネルギーを発散させる年代は、もう過ぎている。倦むことを知らない少年の頃とは違い、軽い疲労の色がにじむ瞬間を持つ二十代の後半だ。女

との苦い訣別を引きずっていたり、死刑囚の父を持っていたり、ポルノ小説の翻訳でたつきを得る自虐の暮らしをしていたり——とうてい健全ではない。売春の手びきまがいの仕事もするし、セックスに関しても自制していないのだ。

そうした立場にしながら、三浦友和の演じる若者たちは、絶望したり悲壮ぶったりしてみせない。老い込むきざしも表さない。一定の純粋な気持ちを守って生きていこう、との姿勢を保っている。『遠い明日』では、軽薄な父を見放しもせず、さりどて馴れ合いもせず一線を画して接していく。『天使を誘惑』では、同棲している女への愛情だけは大事に守っていかうとする。

二十七歳の年齢を感じさせない若々しい相貌や、持ち前のさらりと軽やかな雰囲気、青春晩期の重苦しさを、深刻ぶらずに処理してみせる。持ち味を生かしながら、内面に奥行きを備えた青年像を演じて、なかなか成功しているのだ。少年の日の潔癖なまでの純愛は保てないにしても、自分なりに何かを守りぬいていきたい。三十歳近くなったぼくたちの、そんな気持ちを、三浦友和はスクリーンの上で代弁してくれる。明るい楽しさに満ちた映画『黄金のパートナー』、南の島の青い海、白い砂の中ではしゃぎたわむれる彼のしなやかさに、観ているぼくの方まで心躍ってくるのだ。

(『日本映画 1980 1979 年公開日本映画全集』より)

この間の進境ぶりを語る筆致に、前回より自信がこもっているのがおわかりいただけるだろう。この年わたしは、百恵・友和の『ホワイト・ラブ』をベストテン2位に、友和主演の『黄金のパートナー』を9位に評価し、次点グループに『遠い明日』と、友和の出演した3作を高く買っていた。

●甘さとやさしさを感じさせる三四郎

77年の『青年の樹』の後、この年のお盆映画『泥だらけの純情』、78年のお正月映画『霧の旗』で百恵と共演する一方、『姿三四郎』(77 岡本喜八 脚・隆巴+岡本喜八 原・富田常雄)では、三浦友和ならではの三四郎を創造してみせた。これまたリメイクもので、過去何度にもわたって映画化されてきた大衆小説の古典とも言うべき原作である。東宝・藤田進(43、45 黒澤明)に始まり、東映・波島進(55 田中重雄)、東宝・加山雄三(65 内川清一郎)、松竹・竹脇無我(70 渡辺邦男)という具合に過去の三四郎たちが多数いた。

友和の三四郎は、それらの先達たちとは性格を異にする。冒頭まず、若き三四郎が故郷の会津から東京へ出てくる道中がまず描かれるが、春の若葉の萌える緑の中、画面の奥から客席の方に向かってくるかのように荷を担ぎ、下駄の音高らかに歩いて来る姿にかぶさってニュー・ミュージック風の主題歌(唄 ザ・カルア)が流れるあたりからしていかに

も70年代調である。歌のタイトルも「三四郎」ならぬ「34ROH!」である。

その歌詞に「三四郎! 三四郎! お前は誰だ」というリフレインがあるのに象徴されるよう、友和・三四郎は単に武道の究極をきわめようとするだけでなく、常に自分の存在とは何だろうと自問し続けている。今風に言えば自分探しをしているとでもいう感じだ。このあたりが、時代設定を超えて『青年の樹』とつながっている。

物語も、明治の開化期、柔道の創始に与った若者の成長ロマンという本来の構造から明らかに離れて展開される。敵対する柔道家たちを倒していくことよりも、敵意渦巻く中でもどうやって人を愛する気持ちを貫いていくかが彼のテーマになっている。この三四郎は、柔道の腕もさることながら、それよりも人を愛する気持ちを持ち前にして進んで行く。

だから、本来クライマックスとなるべき宿敵・桧垣源之助(中村敦夫)との右京ヶ原の決闘を最後に持ってくるのではなく中盤に配置し、それから後の部分をていねいに取り扱う。仇討ちを狙う源之助の二人の弟・鉄心(矢吹二朗)、源三郎(宮内洋)から向けられる激しい遺恨の情に対し、戦わずにどう処理していくか三四郎が苦心する過程がポイントだ。

また、試合の上とはいえ死に至らしめてしまった村井半助(若山富三郎)の娘・乙美(秋吉久美子)と恋に落ち、彼女の父親を死なせたのが自分であることに悩む。その一方で、華族の令嬢・高子(神崎愛)から熱い思いを寄せられ困惑する羽目にもなる。およそヒーローらしい颯爽たる風情ではない。

それらを乗り越えての乙美との当世風の初々しい新婚生活が、ハッピーエンドの形で示される。ラスト、どうしても回避しきれなかった鉄心、源三郎との激闘を終え疲れて帰って来る三四郎を、乙美が息せき切って迎えに出る。闘いに勝利した喜びよりも妻との愛の歓びの方が強くほとばしり出る結末である。

柔道場面よりも三四郎の若さゆえの甘さとやさしさを感じさせるこの『姿三四郎』は、やはり自分の甘さに向き合わざるを得なかった当時のわたしの胸に痛切に響き、77年のベストテン8位に選んでいる。わたしにとってこの作品は、明治の柔道一代記ではなく、明らかに70年代の青春映画なのだった。

●タイプの違う藤竜也との共演

『霧の旗』を経た続く主演作『残照』(78 河崎義祐)は、死が間近なのを知った青年が残された日々を生きる姿が扱われた。わざと嫌われるよう振る舞って恋人と別れ、日本海岸に飛来する野性の白鳥の世話をして過ごすというメロドラマ仕立てが鼻につき、気遣ってくれる周囲の人間たちにひたすら柔らかい笑顔で接する青年の姿もかえってあざとく感じられる。

だが、『ふりむけば愛』『炎の舞』の後の『黄金のパートナー』(79 西村潔 脚・長野洋 原・西村京太郎)は、日活から東映に転じ、さらには『愛のコリーダ』(76 大島渚)、

『愛の亡霊』（78 大島渚）でみごとな俳優魂を披露した藤竜也と組んで新しい味を出した快作である。ここでの藤は『野良猫ロック』シリーズの主要メンバーだった頃の日活ニューアクションの匂いを漂わせ、東宝青春映画に新鮮な風を吹き込んだ。

フリーの報道カメラマン野口（三浦友和）と白バイ警官・江上（藤竜也）は風変わりな取り合わせだが、ヨット仲間の二人はいつもつるんでは海で遊んでいる。彼らが由紀子（紺野美沙子）という娘と知り合い、彼女の話に乗って三人で南の島の沖に沈んだ十億円の金塊の謎を探っていく冒険物語に、男二人、女一人の淡い恋の三者関係がからむ青春物語という側面を加えている。

三人は、由紀子の父が海軍時代に関わったという旧日本軍潜水艦に積まれた財宝を追ううち、財宝を不当に独り占めした元秘密機関職員で現在は政財界の黒幕になっている神谷（芦田伸介）の存在を知る。この男が、由紀子の父を殺し秘密を守り抜こうとしているのだった。サイパン沖の海に潜って沈没した潜水艦の艦内金庫から証拠の航海日誌と写真ネガを発見していた三人組は、チームワーク良く大胆にもこの大物をゆすって莫大な金をせしめる。

しかし、追跡に遭い由紀子が殺されてしまう。いつしか彼女のことを好きになってしまっていた野口と江上はおさまらない。再び訪れたサイパンの海で由紀子を葬った後、二人はその地で飛行機の操縦訓練を受ける。そして日本に帰ると自家用機で移動する神谷をつけ狙い、自分たちの乗る軽飛行機ごと体当たりしていく。

身を捨てての壮烈な復讐と思いきや、爆発の後、衝突前に無事脱出してパラシュートで空を舞う彼らの姿が写り、陽気に快哉を叫びながら降下していく。ぬけぬけとしたドンデン返し結末である。

藤の個性の強さと友和の端正なキャラクターとがうまく噛み合っており、ハードボイルドなアクションものとはちょっと違った爽快な映画になった。二人の俳優の持ち味の落差が独特のユーモアを醸し出し、サイパン島の白い砂、青い海の透明感が澄んだ歌声の主題歌「そして、昼下がりに」（唄 来生たかお）に乗って物語を彩る。高校時代にCMに起用されて一躍注目を集めた慶大生の新人・紺野美沙子を加えた三人が光あふれる浜辺をふざけ合いながら探索する点描が、わくわくするほどの活気を感じさせた。

●絶頂期の大作俳優との共演

そして一転、『ホワイト・ラブ』を挟んだ次の『遠い明日』（79 神代辰巳 脚・馬場当原・A.J.クローニン）はスコットランドの小説家クローニンが53年に書いた「地の果てまで」の映画化で、殺人罪を背負った父親の無実を息子が独力で晴らしていく思い題材を扱っている。

さしたる人生の目標もなく函館の街でふらふら生きている明（三浦友和）は、幼い頃死

んだと聞かされていた父親（金子信雄）が実は生きており、殺人罪に問われ獄中から無実を訴えている死刑囚であることを知る。母が再婚するに当たり、彼にその事実を告げざるを得なくなったのだった。

明は遠く九州まで夜汽車に乗り、その19年前の事件が起きた北九州市戸畑の町を訪ねてみた。古い資料を調べ目撃者の話を聞いて父が無実らしいと感じ取り、冤罪を晴らすべく行動を開始する。だが、よそ者の彼に町の人々は冷たかった。事件当時の担当検事（神山繁）が今では検察の大幹部に出世しており警察をも影響下に置いているため、露骨にさまざまな妨害に遭う。

それでも全く味方がいないわけではなかった。地元ローカル新聞社の社長・岩佐（若山富三郎）は、紙面でキャンペーンを張って活動を支援してくれる。岩佐が面倒を見ている政治運動家崩れの女・順子（いしだあゆみ）との間にも、なんとなく心の通じ合いができる。しかし明は彼らに安易に甘えず、あくまで自力でこつこつと19年前の目撃証言を覆していく。

この町はどうやら工場町らしく、いつもどんより曇っている。その陰鬱な空気の中を三浦友和が精力的に動きまわる姿からは、困難を突き抜けようとする力強さが感じられた。身体に鎖を巻き付けた異様な格好で、「私の父は無実だ！」と稚拙な字で書いたプラカードを担いで広い電車通りの真ん中を路面電車や車や通行人を意に介する様子もなく歩いて行くのなど、その典型だった。

遂に明は真相に辿り着いた。真犯人は、なんと岩佐だった。岩佐は全てを告白し、真情を吐露しながら明の前で自ら命を絶つ。過去の罪を隠していた気持ちと償いたい思いとのせめぎ合いに苦しんだ末、自らを裁いたのである。いつしか岩佐に父親に寄せるような尊敬と信頼を感じ始めていた明には、なんとも苦い結末だ。しかも出獄してきた実の父ときたら、尊敬とも信頼とも程遠い下品で卑しい言動や振る舞いしか見せない。

明は、順子に好きだと告白し一緒に行こうと誘う。だが心の底で岩佐を深く愛していた彼女は、結果的にとはいえ彼を死に追いやった明の許へは行けないと悲しい表情で拒絶するのだった。明は、なすすべなく去らざるを得ない。

ここでの三浦友和は、日活ロマンポルノ出身で人間の心の奥を鋭く抉る作風の神代辰巳監督の手にかかって、明らかにそれまでと異質のキャラクターを表現させられている。ロマンポルノの第一人者である神代は、過去にも東宝に招かれて萩原健一主演で『青春の蹉跎』74、『アフリカの光』『櫛の火』75を撮っており、この79年には平仮名に社名変更したについで『赫い髪の女』という男女の心理と生理の深奥を極めた映画を作ったばかりだった。

神代作品では、東宝風の「清く正しく美しく」の雰囲気とはまるで違う、鮮烈ななまなましさが要求される。冒頭では、妊娠させてしまったガールフレンドに中絶手術を受けさせた帰途、バスに乗り合わせたチンピラに絡まれてもオタオタしているだけの青年として

描かれる。およそ、それまでの友和が演じてきた役柄の快男児風イメージとは遠い。

父の無実を証明するため行動を始めてからも、同性愛者めいた図書館員に言い寄られたのを利用して手先に使ったり、事件の証人だった中年女に接近するために彼女と肉体を交わしたり、なりふり構わず目的に迫っていく。活動資金を稼ぐために、見知らぬ太った女の股のできものの膿を口で吸い取ってやって報酬を得ることまでする。

とても、きれいごとだけではすまない。汚いものにも手を染めなければならぬし、性的な禍々しい事柄もついてまわる。それでもこの役を演じるのが三浦友和だからこそ、主人公の持つ心のやさしさがそこはかとなく感じられて、観る側の救いになる。岩佐が罪を告白したとき、たじろいで死ぬな、逃げてくれと叫んでしまう。もし神代作品常連の萩原健一だったら、もっと激しい性格の青年になっていたろう。『遠い明日』は、友和が主人公を演じることで無闇に陰惨にならず、そのぶん深みを増している。

また、友和にとっては若山富三郎との共演も貴重な経験だったと言えよう。55年に新東宝でデビューし、大映、東映を経た後、東宝『子連れ狼』シリーズ72~74で大スターの仲間入りをして名監督たちの多様な作品に出演するようになる。この79年の若山は『衝動殺人 息子よ』（79 木下恵介）と『遠い明日』の演技でキネマ旬報主演男優賞を受賞したのをはじめ、ブルーリボン賞、毎日映画コンクール、日本アカデミー賞で主演男優賞を総ナメにして絶頂期を迎えていた。

『姿三四郎』に続く共演だったが、今回は真正面からこの全盛の役者とぶつかったわけで、大きな糧を得ただろうことは想像に難くない。新鋭監督が担当するのが常だった友和主演作品を岡本喜八や神代辰巳が監督し、『愛のコリーダ』で世界的に知られるようになった藤竜也に続いて大物役者・若山と相対するようになる中で、友和は個性を発揮し内面を充実させていったのである。

●スクリーンのイメージと変わらない、真面目で誠実な人柄に感銘

75年の友和に対して抱いたわたしの危惧は、幸いにも杞憂に終わった。むしろダメだったのは自戒をこめて書いたはずのわたしの方である。『姿三四郎』が公開された77年秋に25歳で劇中の三四郎と同じような若い新婚生活を始め、『ホワイト・ラブ』が公開された79年夏にはその生活を破綻させていた。

77年に創刊した現在の雑誌「クロワッサン」の前身「anan famille クロワッサン」は anan の famille (家族) 版と題されているように、anan 読者の若い女性が家族を持つ、すなわち結婚するムードをかき立てた。そのムードにうかうか乗せられて、大人になりきれてもいなくせに軽はずみに結婚してしまった報いと言うほかない。そう、「甘さに墮してしまわぬよう、内奥の充実を図らねば」ならなかったのは、他ならぬわたし自身だったのである。

三浦友和はそんな愚かな結婚はしない。80年3月に山口百恵との婚約を正式に発表し、同時に彼女の結婚による引退を世間に告げ、ファイナルコンサートや『古都』（80市川崑）を引退記念映画にするなどの準備スケジュールを示した。そしてそれらを粛々とこなした後、同年11月に結婚し百恵は引退、その後今日まで幸せに家庭生活を送っているのは周知の事実である。

ただし、芸能生活の方で一乱あったことは否めない。79年10月大阪でのコンサートの舞台上で百恵が友和との「恋人宣言」をしたときは、マスコミをはじめ上へ下への大騒ぎになった。それを受けて、友和も記者会見で「結婚を前提にして付き合っています」と発言する。自身が矢面に立とうという覚悟もあったろう。

元々、俳優・三浦友和の価値を山口百恵の相手役に過ぎないと過小に扱う誤った論調があった。それが、恋人宣言以来一層激しくなる。わたしたち百恵・友和映画を細密に観てきた者にとっては、画面の中から二人の親密さが既に窺えていたが、そうでない向きには衝撃が大きかったのだろう。特に百恵ファンの側からすれば「やっかみ」的に友和に対して当たり散らす心情もあったろう。

先に述べたように、この年わたしはキネマ旬報ベストテンで主演男優賞を三浦友和に投票している。その選出理由にこう書いた。

【主演男優だが、不当な悪評を受けている三浦友和を、三本の主演作（註『黄金のパートナー』『ホワイト・ラブ』『遠い明日』）それぞれに異なる役柄をこなした成長ぶりで評価したい。】（キネマ旬報80年2月下旬決算特別号）

「不当な悪評」は、それほど執拗に渦巻いたのである。婚約発表で百恵引退が明らかになると、ファンだけでなく彼女を熱烈に支持する識者や文化人の中にさえ、スーパースターを引退させる元凶呼ばわりする動きがあった。そのせいか、結婚する80年に友和単独主演の映画がないばかりか、『古都』でも百恵が二役で出ずっぱりなのに対し、ずいぶんウエイトの低い扱いになっている。

これまで述べてきたようにデビュー時から友和に肩入れしているわたしは、その状況に納得がいかなかった。とはいえ、こちらも評論家デビュー5年そこそこの駆け出しだ。大きな媒体に論陣が張れるわけでもなく、わずかな発言の場で俳優・三浦友和の魅力を訴えるくらいしかできない。

そんなわたしに、友和ファンの団体から連絡があった。たしか神戸の女性を中心に、彼より年長のファンが集まる団体だったように記憶する。ネットなどない時代。「TOMO」というミニコミのファン雑誌が発行されていた。キネマ旬報編集部で住所を聞いたという事務局から連絡があり、「YOMO」に原稿を何度か頼まれた。「トモ（友和の愛称）をちゃんと評価してくれるのはあなただけ」と言われたものだ。

その縁でファンの集いの場で三浦友和とトークをする機会を得た。本書に登場するアイドル青春映画のスターで、わたしが直接会ったことがあるのはこの人だけである。その後も、ニッポン放送で彼が持っていたレギュラー番組にゲストで呼んでもらったことがあり、スタジオでマイクを挟んで対談している。

その都度、スクリーンの中の基本的イメージと寸分変わらない真面目で誠実な人柄に感銘を受けた。たったそれだけの出会いではあったが、山口百恵がこの人を選び引退まで決意したのもよくわかるような気がしたものだ。

その後、三浦友和が俳優として正当な評価を受けるようになったことはご存知の通りである。『台風クラブ』（85 相米慎二）で 85 年度報知映画賞助演男優賞を受けたのを皮切りに、91 年度毎日映画コンクール助演男優賞、99 年度報知映画賞主演男優賞、07 年度キネマ旬報助演男優賞、ブルーリボン賞助演男優賞、09 年度キネマ旬報助演男優賞、日刊スポーツ映画大賞助演男優賞と、多数の演技賞を獲得している。

「不当な悪評」を受けていたこの時期に浴びせられた「つまらない二枚目」「演技が下手」などとの感情的な批判が全く的外れなものであったことは、今や明白なのである。